
母スキンヘッドつるつる

コーキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

母スキンヘッドつるつる

【Nコード】

N4695F

【作者名】

コーキ

【あらすじ】

ボサボサした次女は子供を産んで以来、ドンドンだらしくなつてしまった。見かねた私は散発を命じ、帰宅した次女を見て気が遠くなった。次女はスキンヘッドになっていたのだ。そして私は引きこもる。スカム小説です。現在、ジョルダンで小説を公開しています。よろしかったらアクセスお願いします。 短編「くよくよするなよ」へのリンク<http://book.jorudan.co.jp/cgi-bin/browse.cgi?action=7&pparam=euXuXm3u1u7u4u6>

第1回（前書き）

スカム小説です。

現在、ジョルダンで小説を公開しています。
よろしかったらアクセスお願いします。

短編「くよくよするなよ」へのリンク

<http://book.jordan.co.jp/cgi-bin/browse.cgi?action=7&param=euxmum3u1u7u4u6>

第1回

元来背が高くて、他を威圧する空気を持っているのが次女である。最近、子供を産んでからはこれが全体に膨らんできたモノだからまた迫力倍増で、脇を通過されると周囲に影ができて恐怖を感じるほどになってきている。

さらに子育てと家事に慌ただしく睡眠不足気味で、そこまてかまっちゃいられないのかこのところ見た目の墮落ぶりが甚だしく、たいては長くもない髪を頭頂部でひとつに束ねているのだが、元来毛が黒く、量も多いため束ねた以外の部分が異様に拡がって見え、サイババを想起させるような風体になり果てている。

見かねた私が、

「髪を切ってこい、かわいい孫に恐怖のトラウマが残ってしまうわ」といつてしかたがなく5千円札を差し出すと

「がる」

喉の奥でひと声次女は唸り、鋭いツメで私の手の甲の肉を削ぎながら紙幣をむしり取るが早いか、金の変わりに孫娘を残して疾風の如く走り去った。

「おい、坊主にして来いよ！」

私は通行人をなぎ倒しながら走り去る次女の巨大な背中に向けて、そのように大声でジョークを飛ばし、かわいい孫娘の子守をしながらつい、うとうととうたた寝をしてしまった。

思い暗雲が急激に空を覆い尽くすという悪夢にうなされて目を覚ますと、なにか周囲が薄暗い。

孫はくうくうとちいさく鼾をかいてよく眠っているのだが、その

寝息を圧するように頭上からぐうぐうというヒキガエルが花粉症を患ったような異音がする。

背筋が凍り付くというのはこういうことか。

私の心臓は、5回ほど鼓動を忘れた。

次女が極めて重い空気を纏いつつ、私を見下ろしている。

周囲の光を吸収してそびえ立つその頭部に毛はなく、天井の蛍光灯を背後から浴びてその形相は確認できないものの、その分輪郭がくつきりと浮かび上がっていて、まるでダイヤモンド・リングのように光を反射して輝いている。

私は失禁寸前であった。

次女は親族ではじめてスキンヘッドを経験した者となったのだ。

(つづく)

第1回（後書き）

とりあえず続きます。

短編「くよくよするなよ」へのリンク

http://book.jorudan.co.jp/cgi-bin/browse.cgi?action=7&:parameter=euuxm3u1u7u4u6

第2回（前書き）

スカム小説第2回目です。

現在、ジョルダンで小説を公開しています。
よろしかったらアクセスお願いします。

短編「くよくよするなよ」へのリンク

<http://book.jordan.co.jp/cgi-bin/browse.cgi?action=7&param=euxmuxm3u1u7u4u6>

第2回

「がふがふ」

と喉を鳴らしながら腕を伸ばして私から孫を奪い取り、軽々と肩に担いだ次女は、全身にハレーションを纏いながら歩き去ろうとした。

「おい」

と、私が声をかけると、次女はゆっくりと振り返った。

私は見てしまった、そして。

私は失神し、半日ほど目が覚めなかったようである。

「無数の茶柱が前方から凄まじい勢いで私に向かって飛んでくるのだけれど、その先端がものすごく尖っていて、だからそれをまともに喰らってしまった私は体の前面が極めて細かく、短いハリで覆われたハリネズミのようになり、だがそれだと関節の動く方向からして私はまるくなって外敵から身を守るというハリネズミ本来の防御姿勢がとれないのでうんうん唸りながら困っていると、突然全身が硬直し、なにかに操られるようにして反り返り、やがて今度は逆向きすなわち、背中を内側にして曲がるように背骨はぼきぼきと音をたてて折れ、やがて私は茶柱針に覆われた前面を外側にむけてエビ反りでまるまっっているという、極めて無様な格好のまま真っ赤な夕日の沈み行く砂漠を疾走していた。

しかし、目の前に金髪和装の美女が出現し、突進してくる私を真っ正面から受け止め、茶柱針によって血塗れになりながらも子守歌で私を寝かしつけてくれた。

私は、ほろほろと涙を流しながらも、私を慈しんでくれる金髪和装のその美女を頭からバリバリと喰らった。

私には長く鋭い牙があって、そいつが美女の肉を骨を突き刺し切り

裂き、砕いては喉に流し込んでいく。

口のなかにアルミをかんだような不快臭と美女の体液のどろどろを感じたまま『ごめんよごめんよ』と呟き、私は泣いていた」

と、そんな内容の悪夢にうなされて私は目が覚めた。

全身をどろどろした汗が覆っている。

目の前ではスキンヘッドの次女が洗濯物をたたんでいて、窓から差す夕日がその半身を真っ赤に染めている。

赤ん坊がギャツとひと声泣いて、次女が顔を上げた。

思いだした。

私はこれを見て失神したのだ。

眉がない。

スキンヘッドで眉がない。

頭部に毛がない。

これはとてつもない恐怖である。

赤ん坊を見つめて、恐怖が笑っていた。

(つづく)

第2回（後書き）

短編「くよくよするなよ」へのリンク

```
http://book.jorudan.co.jp/cgi-  
bin/browse.cgi?action=7&amp;pa-  
ram=euxmuxm3u1u7u4u6
```

第3回（前書き）

スカム小説第3回目です。

現在、ジョルダンで小説を公開しています。
よろしかったらアクセスお願いします。

短編「くよくよするなよ」へのリンク

<http://book.jordan.co.jp/cgi-bin/browse.cgi?action=7&param=euxmuxm3u1u7u4u6>

第3回

これで何度目になるだろうか？

私はいろいろと嫌な目にあつたび自室にひきこもる男で、引きこもって何をしているのかといえば、妻子への建前としては「執筆」である。

もちろん「執筆」だけをしてるわけじゃなくて、ネットでエロ動画をみたり秘蔵のエロビデオを鑑賞したりしながらマスターベーションもしているし、古い映画を鑑賞して涙を流していることだってある。

だが、執筆だって嘘じゃない。

一応PCに向かってキーを打ち、文章を書いているのだから、それは執筆である。

では何を書いているのか？小説か？詩か？エッセイか？評論か？いや、そう言うことではなくて「私は執筆をしている」という事実を目を向けてもらいたいのだ。

作品のジャンル分け、分類、そんなことよりもとにかく、書いている、書いている、書きまくっているのだからその書きまくったモノが発表されればそれはもう出版社が勝手に分類してくれるわけだから私は書いていさえすればいいのだが、ここでひとつ大きな問題があると言えはある。

執筆はたしかにしているが、それが世に出ることはないという事実である。

引きこもっている最中書き続けた文章、それが引きこもり期間を終えて世間に出ていく私にとってはなにやら白々しいものに思えてしまい、どうしてもPCごと破壊しなければならぬという強迫じみた観念に追い立てられた結果、実際にその都度何もかもを破壊してしまうからである。

そんなわけで、つるつるの次女を見てショックを受けて以来、私

は引きこもり、キーを打っていたのだ。

そして今日、またしても書きためた文章をPCごと破壊して破れ襖を横に引き、私は部屋の外に出た。

そこは廊下。

古くて、真つ黒に汚れた廊下にワックスが分厚く塗っており、てかてかと光沢を放っている。

まあそれはいい。

古い日本家屋の美しさである。

その光沢を放つ廊下の突き当たり、便所の扉を背にして、次女が赤ん坊を抱いたまま半眼で結跏趺坐している。

私が引きこもっている間につるつるだった頭部にも毛が生えてきたようで、頭髮、眉、共にゴマだらになっている。

そろりそろりと近づいて見ると、次女の呼吸は以前の荒々しいそれではなく、禅宗の僧侶よろしく平穩に長く続いているし、どうやら赤ん坊は乳を飲んでいようだ。

まあこれはこれで瞑想の一種かもしれないしそつとしておこうと、そんな神々しい次女を横に見ながら居間に足を踏み入れればそこは私がひきこもる以前となんら変わらぬ妻の日常的な生活が繰り広げられているすなわち、大音響でテレビをならしながら、それを圧するような鼾をかき、爆睡している。

私は微かな不条理を感じると共に、突然便意を催した。

後を振り返ると、いつの間にか次女は修行を終えたのか、便所扉の前からいなくなっている。

「やれやれ」と、洋風に肩をすくめつつ、私は便所に入り、内側から鍵をしてズボンと下着を下ろし、尻を便座に下ろしたのだが、肝心の用を足す前になぜか激烈な睡魔に襲われ、そのまま眠ってしまった。「そう言えば、執筆に忙しくて寝る時間がなかったからね」なんて空々しいことを呟きながら。

(^u^u)

第3回（後書き）

スカム小説第2回目です。

短編「くよくよするなよ」へのリンク

http://book.jorudan.co.jp/cgi-bin/browse.cgi?action=7&:parameter=euuxm3u1u7u4u6

最終回（前書き）

スカム小説最終回です。

現在、ジョルダンで小説を公開しています。
よろしかったらアクセスお願いします。

短編「くよくよするなよ」へのリンク

<http://book.jordan.co.jp/cgi-bin/browse.cgi?action=7&param=euxmuxm3u1u7u4u6>

最終回

目が覚めると便意は消失していて、冷えたのか肛門が痛い。

私はそろりそろりと立ち上がり様、ズボンと下着を引き上げて解錠し、扉のノブを回しつつ外に押したのだが、どうしたわけかうんともすんとも言わない。

鍵の具合が悪くなったのかと思い、なんどかがちやがちやさせて確認したのだけれど、異常は感じられず、快調である。

私は頸をかしげ、もう一度扉を押しつつ磨りガラスの小窓から外を覗いて悲鳴を上げた。

小窓の真下、扉の真ん前にゴマだら頭が見えたのだ。

なにをやってんだ、こいつは？

「こら、そこをどかんか！便所から出られないじゃないか！」
そんなことを言いながら扉をぐんぐん押した。

まったく動かなかった。

私はしばらくの間、そんな感じでひとりわあわあ騒いでいた。

小窓を叩き割ってそのガラスの破片による次女の強制撤去も考えたが、次女は孫を抱いているはずであり、迂闊に攻撃すると被害が孫にまで及ぶ可能性があると思うと実行を躊躇してしまふ。

私は強行突破を諦め、軟化政策に切り替えた。次女を宥め謙し諭し持ち上げご機嫌を伺い、泣きながら懇願した。
しかし次女は微動だにしない。

便所にあるのは水と紙だけである。

激烈な空腹感が襲ってきた。

そして日が暮れる。

そして夜が明ける。

そしてまた日が暮れる。

そしてまた夜が明ける。

どんどんどんどん日が暮れる。

どんどんどんどん夜が明ける。

もはや何がなんだかわからない。

私の髪は随分と伸び、便所の紙は喰い尽くして最近の水だけで命を繋いでいる。

もう暴れもしないし泣きもしない。

当たり前のように便所で暮らしている。

座って眠るという行為が長時間睡眠には向かない事を学習し、私は狭い便所のリノリウム貼りの床に、便器に巻き付くがごとく身を丸めて眠る技術を体得した。

居間から聞こえてくる妻の鼾とテレビの音。そして次女の長い呼吸。時折孫がきゅっと笑う声もきこえてくるのだが、やはり次女の腕の中、この扉の前にいる気配がある。

なんたる長い時間座り続けているのだ？

なんの修行だ？

いや、もうそんな事すらどうでもよろしい。

最初の不条理感さえも消えた。

小窓から覗くと、次女の頭は黒々としている。

私も次女も髪が伸びた。

キョッキョッと孫の笑う声が聞こえた。

私は便器のふたをおろし、その上に腰掛けて足を組み、次女と同調するように長い呼吸を始める。

孫の笑い声がまた聞こえた。

私は半眼で更に呼吸を整える。

やがて私と次女の呼吸に妻の鼾が同調を始めた。

しばらくすると、孫の寝息も聞こえてきて、これも私たちの呼吸

に同調する。

この家の住人が同じ調子で呼吸して、ただひたすらに生きている。生きるために必要なものって、あんまり多くはないんだと気付く。我々はなぜこんな事になったのか？という疑問がちらりと脳裏をかすめたが、やがて消えてしまった。

確かに結果的にはこうなったのだ。だが、今がこうである限り、過去を想ってもなんの意味もないではないか？

息を吐いて。生きている。

息を吸って。生きている。

また孫が笑い、廊下の突き当たり、私の部屋の窓からこの便所の小窓まで、真っ赤な夕焼けが差し込んでいる。

（了）

最終回（後書き）

最後まで読んでいただいてありがとうございました。

また近々投稿したいと思いますので、よろしく願います（；・
人・；）

短編「くよくよするなよ」へのリンク

<http://book.jorudan.co.jp/cgi-bin/browse.cgi?action=7&param=euxmuxm3u1u7u4u6>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4695f/>

母スキンヘッドつるつる

2010年10月8日15時36分発行